



「こっちにもまいて！」参詣者から声が上がりました

祭

復刊第十七号
2013年 3月
身延別院発行
〒103-0001
東京都中央区
日本橋小伝馬町3-2
Tel 03-3661-3996
Fax 03-3663-2766

節分会法要

たくさんのお参詣者でにぎわう

除災得幸 福は内 除災得幸 福は内 。身延別院の節分会と星祭りが二月三日に行われました。今年も日本橋小伝馬町の当院には一年の幸福と社会の安穩を願う参詣者がたくさん集まりました。

節分は二十四節気の気候が移り変わる「立春、立夏、立秋、立冬の前日」のことを言いました。しかし、春を迎えることは新年を迎えることと同じくらい大切な節目だったため、室町時代の頃から、節分といえは立春の前日だけを指すようになりました。また、季節の変わり目には邪気が入りやすいと考えられており、新しい年を迎える前に邪気を払って福を呼び込むため、宮中行事として追儺(ついな)という行事が行われるようになりました。その行事の一つ、豆打ちの名残りが「豆まき」です。

午後一時から本堂で節分会の法要が営まれ、檀信徒約百五十人が参列しました。当院ゆかりのお上人がたが法華経の序品、方便品、寿量品、神力品、普門品を力強く読誦した後、一年の安穩を願ってご祈禱を行いました。午後一時五十分ごろから豆まきとなり、住職をはじめ、年男・年女の檀信徒の皆さんが「除災得幸 福は内」と言いながら境内の参詣者に向かって福豆や福銭をまきました。

今年の節分会は日曜日にあたっていたため、家族連れの姿が目立ちました。「ぼくは豆のほかに、チョコレートもキャッチしたよ」「私は福銭をこんなに手に入れた!」 子どもさんがお父さん・お母さんに自慢する、元気な声があちこちで飛び交っていました。

(平山)



上国寺の住職は、都内の寺院住職が兼務していました

御首題を いただく旅

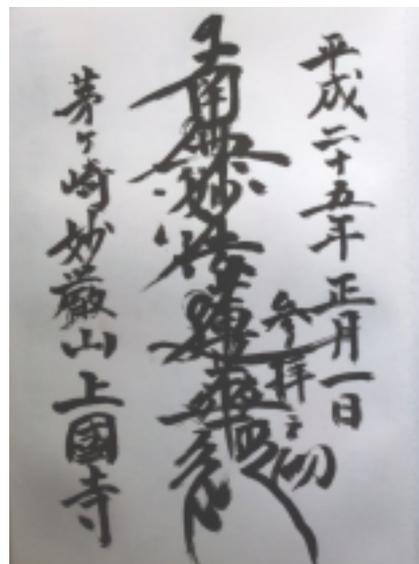
第十七回 神奈川県茅ヶ崎市・上国寺

応永年間の創建

全国の日蓮宗のお寺をお参りし、ご首題をいただく旅も、このころはなかなか時間が取れなくなっていました。休みの日の土曜、日曜日も何かと用事が入ることが多くなる一方、都内や千葉県内などの近場のお寺はだいたい行き尽くしてしまい、時間をかけてはるばる訪ねるお寺ばかりになってしまったからです。このため、初めてのお寺を参拝するときは、事前に手紙や電話で連絡を取っておくとか、知り合いになったご住職に紹介をいただいで都合を確かめてから出かけるようにしています。

さて今回、ご紹介する上国寺はJR茅ヶ崎駅から徒歩三十分ほどのところにあります。住宅街にあるお寺ですから、対応してくれる人がいらつしやるお寺と思っていました。念のため、以前に茅ヶ崎市内のお寺を参拝したときに知り合いになったご住職に上国寺について電話で尋ねてみました。すると、「上国寺さんは、ふだんはだれもいませんよ。お寺の行事や法事があるときだけ、東京都内のお寺から代務の住職がみえるのです」と教えてくれました。「えっ、そうなのですか」と私。手紙で連絡を取っても、次に法事があるときまで手紙が読まれない可能性もあるとのことでした。

上国寺は、応永年間(一三六八〜七四年)に、



日蓮聖人の有力檀越、下総の守護職・千葉胤貞の縁によって建立されたと伝えられるお寺です。開基は大乗院日経上人であると言い、日経上人はみずからの師である中山法華経寺三世・浄行院日祐上人を開山と仰ぎました。また、永正十一年作の祖師像は茅ヶ崎市の文化財に指定されています。

そういう名刺でしたから、私はぜひ参拝して、ご首題をいただきたいと思ったのです。連絡が取れないのでは残念です。

ところがです。電話で尋ねたこのご住職は、東京都内のお寺の名前も教えてくれました。私は驚きました。そのお寺は、以前訪ねたことがあり、ご住職や奥様と親しく話をしたお寺でした。不思議なご縁です。さっそく電話で連絡を取ってみると、一月一日の午前中に上国寺で新年の行事をするとのこと。今年最初に私がいただいたご首題は上国寺となりました。

(平山徹・新聞記者)

副住職がインドの寺院で法要



タージマハールを訪れた副住職(後列左)



十一月下旬でしたがインドは暖かった

インドの日蓮宗寺院で、海外布教の現場を見てきました。身延別院副住職の藤井教祥師が昨年十一月二十八日、インド中西部のナグプール市を訪れ、妙海山龍宮寺の十二周年記念法要に臨みました。龍宮寺は日蓮宗の篤信者・小川法子女史とインド人の熱心な仏教徒によって建立され、平成十一年十一月二十三日に盛大な落

慶法要が営まれました。地上二階建て、間口十一間・奥行き二十間、延べ四百坪という大きな本堂を持つ大寺院です。

今回の十二周年記念法要に際して、日蓮宗の海外布教組織である国際仏教親交会から全国日蓮宗青年会(全日青)へ参加の呼びかけがありました。当院副住職は現在、全日青執行部で事務局を担当していることから、全日青の若手僧侶三人と記念法要に出仕することになりました。十一月二十六日に東京・羽田空港を出発し、タイ・バンコク経由でインド・デリーに入りました。タージマハールなどの著名観光地を視察した後、二十八日の記念法要に臨みました。

龍宮寺の境内は、現地の人々であふれ、数え切れないほどでした。副住職は、日本から訪れた僧侶約二十人と共に参集者の前に立ち、法華経要品を誦誦。続いて世界平和を願ってご祈祷を行いました。法要は一時間ほどで終わりました。インドに滞在した四日間は天気にも恵まれ、三十日には無事に帰国しました。

インドは仏教が生まれた国ですが、現在ではヒンズー教を信仰する人が多く、仏教は廃れてしまっています。記念法要のような行事には、確かにたくさんの人々が集まりましたが、イベントや炊き出しを目当てにやってくる人も多く、純粹に仏教を信仰する気持ちからお寺を訪ねる人は少ないようです。海外布教の拠点として大寺院を建立するのは尊く、素晴らしいことですが、その後、お寺を運営していくことは決して楽なことではなく、厳しい現実を感じました。

法華経寺と柴又帝釈天へ初詣



荒行堂の参拝を終えた檀信徒の皆さん



総武霊園で記念撮影する一行

身延別院の檀信徒の一行が一月六日、千葉縣市川市の中山法華経寺荒行堂と総武霊園、東京都葛飾区の柴又帝釈天・題経寺を参拝しました。本年最初の団参で、新春初詣です。参加したのは藤井住職はじめ檀信徒の皆さん二十四人。一行は午前九時にバスで当院を出発しました。最初に訪れた法華経寺では、荒行堂で副伝師として化導中の札幌・日登寺住職、佐藤光則上人を見舞いました。日登寺と当院はそれぞれ先代の時から親交があり、また、佐藤上

人と当院住職は身延山の信行道場で同じ時に修行したご縁があります。続いて訪れた総武霊園では当院開山で身延山久遠寺第七十三世法主の文明院日薩上人と、当院初代住職で身延山久遠寺第八十六世法主の藤井日静上人のお墓をお参りしました。総武霊園を出発した一行は午後一時過ぎに葛飾区の柴又帝釈天・題経寺に到着。本堂でお開帳を受けた後、同寺の彫刻ギャラリーを見学したり、参道を散策したりしてひとときを過ごしました。

当院の新年祈禱会には三百人

身延別院で正月三ヶ日、「願満高祖日蓮大菩薩」御開帳新春祈禱会が厳修されました。当院の新年最初の恒例行事です。大晦日の夜より門扉を開け、年が明ける夜中の零時から第一回目の祈禱会が始まりました。隣接する十思公園では除夜の鐘が撞かれ、町内の住人が多数訪れていました。今年も夜中の零時からお参りの人が訪れ、未明の午前二時過ぎまでご祈禱が続けられました。いったん休みをはさんで、午前八時から再び続けられました。三が日の参詣者は約三百人に上りました。参詣者には住職からお屠蘇がふるまわれ、祈願木札、曆、葛菓子が生かされました。



御祈禱を受ける檀信徒の皆さん(1月2日、当院で)

寺の動き

浅草を舞台に縁結びの集い

身延別院青年会は十二月十五日、「お坊さんと縁結び合コン」を開きました。若い女性に寺への関心を持ってもらおうと、青年会が企画しました。「縁結び」に関するイベントは昨年十月の「日本橋七福神めぐり合コン」に続いて二回目となるものです。今回は、男性参加者を「お坊さん」と限定、舞台を浅草にしたところが『変更点』でした。

青年会のメンバーが未婚の友人にチラシを配ったり、フェイスブックで参加を呼びかけたりし



参加者全員で唱題行をしました

た結果、三十代の都内のお坊さん四人と、二十代の女性四人が参加しました。富山県や京都府から参加した女性もいました。

参加者はこの日午後二時に浅草の妙音寺に集合し、唱題行と自我偈の写経を行いました。その後、青年会スタッフの案内で、浅草寺界隈や合羽橋商店街などを散策。午後五時から、浅草のビアホールで二時間にわたって楽しいひとときを過ごしました。

青年会では今年四月にも縁結び合コンを予定しています。参加してみたいという方、どうぞ当院副住職までご連絡ください。

副住職が寒行

東京都東部日蓮宗青年会の寒行が一月二十一日から三日間にわたって行われ、当院から藤井



寒行初日、当院に集まった若手僧侶

教祥副住職が参加しました。寒行は、一年間で寒さが最も厳しくなるこの時期に、日蓮宗の僧侶が団扇太鼓をたたき、お題目を唱えながら、街中を行進するものです。

寒行の初日、副住職をはじめ東京東部管内の寺院の若手僧侶四人が午後六時に当院を出発。会社帰りのサラリーマンたちが行き交う中、日本橋浜町の清正公寺まで歩き、そこで折り返して、再び当院への道を歩きました。団扇太鼓の大きな音に驚く人や、四人の上人たちに思わず合掌する人の姿も見られました。

豆入れ奉仕に十七人

身延別院の檀信徒の皆さん十七人が一月十九、二十日、節分会(豆まき)で用いる豆の袋詰めを地下ホールで行いました。まかれた豆を参詣者が持ち帰れるように、小さなビニール袋に詰める作業です。今年は六斗五升分の豆が用意されました。檀信徒さんたちは、役割を分担しながら手際よく作業を進め、一万袋を用意しました。

豆入れ奉仕にご協力いただいたのは以下の皆さんです。

阿久津喜美子、石渡日出子、伊東精子、今井善子、奥野洋子、勝見登志子、北村孝子、小島貴恵子、小林聰子、佐竹美智子、杉山尊子、鈴木薫子、寺久保トシ子、林好江、丸山定子、山口美帆子、龍憲吾(敬称略)。ありがとうございました。

栃木、岩手のお寺が当院を団参

栃木県小山市の妙建寺(住職・西口玄修上人)の檀信徒の皆さん二十一人が一月二十三日、当院を参拝しました。妙建寺は建武元年(一一三三四年)の創建で、日蓮聖人の六人のお弟子さんの一人、伊予阿闍梨(いよあじやり)日頂上人を開山と仰ぐ名刹です。

住職の西口上人が大学生だった時、当院で隨身をしていたご縁があります。その後も西口上人は当院をたびたび訪れていますが、団参で訪れたのは初めてのことです。

一行はこの日午前十一時に当院に到着しました。本堂で願満日蓮大菩薩のお開帳を受け、地下ホールで昼食を取った後、当院を後にしました。



当院を参拝した妙建寺の檀信徒の皆さん



当院を参拝した法華寺の檀信徒の皆さん

一方、昨年十二月十五日には、岩手県遠野市の法華寺(住職・阿部是秀上人)の檀信徒の皆さん三十四人が当院を参拝しました。毎年この時期に参拝いただいているものです。当院と法華寺は縁が深く、住職の阿部上人は当院初代住職の藤井日静上人が身延山法主だったころ、学生として隨身をされていました。また、法華寺の開山は当院初代の藤井日静上人です。一行は十五日早朝に当院に到着。地下ホールで休憩し、朝食をとった後、本堂でお開帳を受け、当院初代住職一乘院日静上人、二世妙道院日光上人のご回向を行いました。

豆まき後の福引も大盛況

二月三日の節分会では、豆まきの後、豪華賞

品の当たる福引きが本堂で行われました。年男・年女として申し込みを済ませた檀信徒さんを対象に行っているイベントです。商品は本年も、帝国ホテルペア宿泊券、薄型液晶テレビなどの豪華なものです。また、博多烏鍋セットなどの賞品が総代から提供されました。抽選機からの番号が読み上げられるたび、賞品を引き当てた檀信徒さんたちからは大きな歓声が上がっていました。

今後の予定

三月二十三日(土) 春季彼岸会大法要

午後一時より

四月 一日(月) 願満祖師御開帳

八日(月) 花まつり

十三日(土) 十三日講法要並法話

編集後記

願満十七号をお届けします。当院副住職が、昨年十一月二十八日、インドの日蓮宗寺院を訪れ、法要に参列しました。今回はその様子特集ページでお伝えしました。海外でお寺を維持し続けることがいかに難しいかということも副住職の話から感じました。皆さんはどう思われましたか。次回は八月の発行を予定しています。(平山)

お焼香の仕方や線香の立て方について教えて下さい

仏教何でも質問箱



答え



お線香の立て方から説明しましょう。まず、立
 てる本数ですが、三本か一本のどちらかです。二
 本や四本ではありません。儒教は偶数を用います
 が、仏教は奇数です。三本を等間隔に香爐に立て
 ても、あるいは三本をまとめて立てても構いませ
 ん。ただし、先の人が立てて短くなった線香のす
 ぐ近くに自分のを立てると、自分の線香に火が移
 って、根元近くが焼け折れてしまいますので注意

しましょう。

次にお焼香の作法を説明しましょう。まず、回
 数ですが、これも線香と同じく一回か三回です。
 普通は三回がよいでしょう。焼香台の前に立ち、
 御宝前に向かって合掌して恭しく一礼します。こ
 の時、男性は決して仁王立ち(両足を開き気味に
 立つこと)にならないように気を付けましょう。
 両足は必ず平行にそろえます。次に香盒から適量
 をつまみ取って目の高さに戴き、それを香灰の上
 に静かに置きます。これを三回繰り返します。焼
 香が終わったら、再び合掌して一礼して焼香台か
 ら離れます。

以上は焼香の仕方です。順序が逆ですが、次に
 自分の席から焼香台に立つ前までの作法について
 説明しましょう。

図1は別院の本堂です。法事の場合は御宝前の

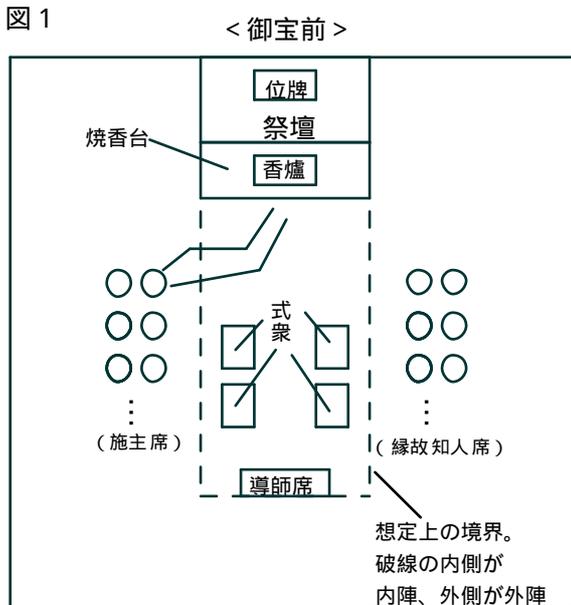
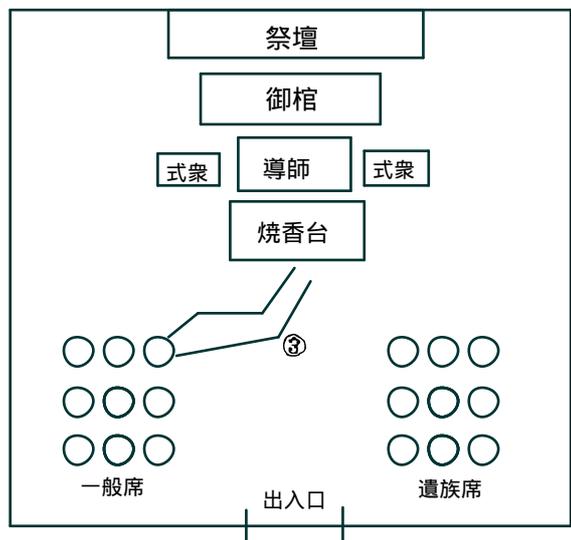


図2 セレモニーホールなど



前に祭壇が置かれ、その上段にお位牌が置かれ(忌明
 け法要の場合はお骨も)、その下段にはお供物など、
 最下段には写真が置かれます。焼香台はその前に置か
 れています。施主・遺族席は正面に向かって左側、縁
 故知人席は向かって右側です。さて、焼香の時間にな
 りました。まず、左側の施主が最初に立ち上あが
 り、焼香台へ向かいますが、この時後ろを向いて礼を
 する必要はありません。自分の家族に対しても礼をす
 ることになってしまつからです。後に続く人も同様で
 す。立ち上がった後、想定線の所で立ち止まり、法
 要の主導者である導師の方を向いて合掌し、一礼した
 のち、再び焼香台に向かって進み、ここで正面を向
 いて合掌、一礼してお焼香します。終わったあとと自席
 に戻るときも、内陣と外陣を隔てる想定線の所で立
 ち止まり、合掌して導師に一礼したあとと自席に向か
 います。以上が焼香台に向かう作法です。

図2は、セレモニーホールなどにおける通夜告別式
 などの配置です。遺族席が一般参列者と区別されてい
 る場合もありますが、要領は同じです。お焼香は遺族
 が先にします。一般参列者が多い場合は焼香台が左右
 に並び、香爐がいくつも置かれ、また入り口付近に
 も置かれる場合があります。一般参列者としてお焼香
 するときは、立ち上がって焼香台に向かいますが、
 たいいてい導師の後ろに焼香台が置かれているので、導
 師に対して礼をする必要はありません。焼香台に向
 かって合掌して一礼。そのあと三回お焼香します。終
 わって合掌一礼。このあと、遺族に対して一礼して
 から自席に戻ります。後に続く人は同様にします。
 どんな場合でもお焼香の時は、御霊に対してこの香
 の煙をご供養として捧げます、と恭しく心をこめてお
 焼香しましょう。粗野粗雑な態度は禁物です。